

城

山の堀川を挟んだ北西に松江歴史館がある。その門をくぐって南に行くくと復原長屋がある。その名の通り、江戸期の長屋を復原したものだ。落語でおなじみの九尺二間の裏長屋ではなく、もともと松江藩家老宅であったものなので、簡素ではあるが、かなり大きくてりっぱなものだ。東側が大きく開かれており、西側は障子をはめた格子窓が開いている。そこから遊覧船の行き交う堀川とその先には石垣が見える。

松江歴史館で毎週水曜日の定期寄席を開くに至ったことは、すでに書いたが、最初からこの復原長屋を使うという構想はあった。畳敷きの広間と黒光りする板敷きの間とどこを使うにせよ、落語にはびつたりの和空間なので、ぼくも楽しみにしていた。ただ、いかんせん断熱だの暖房だのとは無縁の空間なので寒い間は使えない。四月になって、暖かくなってきたのでいよいよ使ってみましょうということになった。

作業台にしている大ぶりの机を高座とし、板間に丸椅子を並べてみると、飾りつ気はまったくないが、それなりの寄席空間になった。

寄席は閉じている空間の方がやりやすい。開放的だと演者も聞き手も集中が難しく、散漫になった空気の中で漸を続けるのはかなりの力業だ。何度も痛い失敗

をし、そういう依頼は断ることにしているのだが、この復原長屋は少し奥まった位置にあって、開かれてはいるがわずかであつてもわざわざ足を運ぶ必要があるから、それが見えない扉となって、子どもたちもそれほどやりにくさを感じていないように見える。

三回、四回と復原長屋の寄席を順調に重ねたある日、四月とは思えない寒さに見舞われ、おまけに間断なく霧雨が降っている。歴史館の客足もまばらで、ましてや復原長屋まで足を運ぶ人はいない。お客さん不在のまま、「まあこんな日もあるよ」と言いながら内輪だけを聞き手に稽古をした。訪れる人がないまま終わり片づけ始めていた。少し離れたところで観光客が歩いているのが聞こえてきた。

「ねえ、お客さん呼んできていいですか？」

「いいけど、どうやって？」

子どもたちはにわかに活気づいて、小雨の中を外に出て行くと、すぐに、

「来てくれるって。三十秒だけ小咄聞いてくれるって！」

あわててかばんにしまったお囃子の音源とスピーカーを引つ張り出す。東京から来た職場仲間の若者四人の男女。えらく喜んで時間を延長して聞いていくてくれた。いなければ呼んでくる、その行動力に脱帽。

老い老いに
木幡智恵美

31

夕

焼け通信が始まって六年目にあたる一九九八年度も、新たな書き手を次々と迎へながら発行し続ける。随筆や詩、講演録、時折海外事情も載せ、大概B5版八ページを保った。

そして年度途中で一九九九年に突入する。ノストラダムスの大予言で人類が滅亡すると言われた年に至ってしまった。我が子たちは、時々、「今年で人類は滅亡するんだって」などと口に出すものの、本気で怖がっているわけでもなく、元旦は初詣のあと、おもちゃ屋に寄って人生ゲームとチョコQコースを買って帰った。我が子たちが遊んだチョコQは、孫がほんの幼い頃に喜んで走らせ、近頃は寛大と実歩が人生ゲームをしたがるようになった。さて、その一九九九年はどんな年になったのか。国内の十大ニュースを挙げる。

一、東海村核燃料加工会社で国内初の臨界事故 二、住友・さくら銀合併、第一勧銀など三行統合と金融再編大展開 三、臓器移植法に基づく初の脳死移植実施 四、集団暴行、覚せい剤使用もみ消しなど神奈川県警不祥事発覚 五、北朝鮮工作船が日本領海侵犯、初の海上警備行動の発令 六、ガイドライン関連法、国旗国歌法など自公の賛成で成立 七、自公の小渕改造内閣発足 八、日産とルノーが資本提携、自動車業界の国際的再編進む 九、完全失業率、過去最高の四、九%を記録 十、新幹線トンネルでコンクリ崩落事故続発

核燃料臨界事故をトップに、金融業界のごたごた、警察の不祥事、戦前を思わせるような政治等々、危なげなニュースばかりだ。日本国内だけではない。海外ではコソボ民族紛争が起こり、トルコや台湾では大地震が起きている。

ノストラダムスの大予言の通りに七月に人類は滅亡しなかったけれども、世界中で起きていることはその予兆のように思える。現に二十一世紀に入ってから、アメリカでは同時多発テロ、わが国では東日本大震災・福島原発事故が起こり、地球温暖化による異常気象、天変地異が頻発し、各地で紛争が絶えない。世界の均衡は壊れ、どう転がっていくか分からない状況だ。それら諸々の影響を受けながら物価が高騰し続け、日々の暮らし自体が不安定になっ



30代フリーター 毎日新聞の全国世論調査（4月12、13日実施）によると、兵庫県知事の齋藤元彦がパワハラ疑惑などで内部告発された問題で、告発者を特定し懲戒処分したのは「公益通報者保護法に違反する」と県の第三者委員会から指摘されたことについて、指摘を「受け入れるべきだと思う」が59%にのぼり、兵庫県の回答者に限っても5割強を占めている。それでも受け入れる気のない齋藤は世論の批判を浴びて辞職に追い込まれることになるのだろうか。

年金生活者 齋藤以上に法をないがしろにしながら権力を振るい続けるトランプの姿を見てみると、そうとは言えなくなってくる。

「違法」の指摘を受け入れない知事に対し、県議会が去年に続いて再び不信決議案を可決した場合を考えてみる。齋藤が対抗して議会を解散しても、議員選挙を経て新しく構成された議会が再び不信任決議案を可決すれば、彼は自動失職する。だが、後任の

知事を選ぶ選挙に立候補すれば、齋藤は当選する可能性が相当程度あると見なければならぬ。

一番の根拠は議会による不信任決議で失職した齋藤が去年11月の知事選で事前の予想をくつがえして再選されたことだ。この事実、たとえばパワハラや公益通報者保護法違反の疑いがあったとしても齋藤を有権者の多くが評価したことを意味する。前の知事が進めた事業を無駄遣いとしてストップをかけ、行政改革を進めたとする齋藤に対し、それに以上に有権者に響くビジョンを他の候補者たちは示すことができなかったということだ。

30代 齋藤再選の要因としてSNSの影響があげられた。他候補についてのフェイク情報や内部告発者への非難が流布され、さらに齋藤に対する県議会百条委員会の追求を「いじめ」と非難するメッセージが拡散された。

年金 それらが齋藤に有利に働いたことは確かだろう。しかし、最大の要因は前県政を否定する「改革」に有権者

に続いて2度も面目をつぶされる恐れがあるからだ。

アメリカでは反トランプのデモが各地に広がっているが、彼を辞めさせるのは齋藤を辞めさせるよりも難しい。議会による大統領弾劾には、下院で過半数が訴追に賛成し、上院で3分の2が有罪に賛成することが必要だ。次の中間選挙で民主党がそれを可能にする

が期待したことにある。それは、トランプを生んだものつながつている。

両者に共通しているのは「創造」なき「破壊」であり、それを支えているのは、とりあえずこのどうしようもない現状を壊してほしいという有権者の願望だ。

トランプは2度目の就任演説で「常識の革命」を始めると言った。そして始めたのが、法外な高関税、USAI D（米国際開発局）の解体、WHOからの脱退といった既存の秩序の「破壊」だ。その対象はアメリカが覇権国家だった時代に世界支配のために必要としたシステムであり、覇権国家の座からずり落ちつつある現在、それらは大きな重荷に転じた。トランプはそれをリストラしようとしている。だが、「革命」のあとアメリカと世界がどうなるか、そのビジョンを示しているわけではない。

齋藤も同様だ。「改革」を掲げて初当選し、不信任決議で失職後の選挙でも同じ訴えを続けて再選されたが、こ

議席数を獲得する可能性はまずない。

齋藤もトランプもいろいろ悪いところはあるが、いま辞めさせてしまうと、前の政権と同じような政治にあと戻りする恐れがあり、それは嫌だという有権者が半分以上いると推定される。

30代 危うい未来よりも、あと戻りのほうを恐れるのはなぜなんだ。

年金 日本でもアメリカでも、生活を支える経済の力がじわじわと弱まっているのが実感され、今の社会に希望を見いだすのが難しくなっている。それは今までのやり方が間違っていたせいだ、と多くの有権者が考え始め、それを壊す政治を待ち望むようになった。壊したあとどうなるかを考える余裕がないくらいその願望は切迫しているのかもしれない。

ポスト産業資本主義の限界があらわになっているのに、次の段階の資本主義の姿が見えてこない過渡期のきしみが経済の足を引っ張っていることが、世界的な背景としてある。

れまでに実行したのは前任者の進めていた事業を次々ととりやめることだった。新しい事業として目立つのは県立大の無償化くらいで、それも受益者は県内高校卒の2%程度とされている。「改革」という名の「破壊」のあとどんな兵庫県を「創造」するのかビジョンは見えない。

30代 なのに、トランプにも齋藤にも信者に近い支持者がいる。

年金 信者だけでは当選できない。それ以上に大きいのは「前と同じような県政に戻したくない」という有権者が多いことだ。

齋藤に対しては、第三者委員会による「違法」の指摘を受け、立憲民主系系の県議会の会派が不信任決議案の再提出を視野に対応を検討する方針を示したと報じられている。だが、不信任案再提出の動きは議会内に広がっていない。さっきも言ったように、決議案が可決され、齋藤が失職したとしても、後任を選ぶ知事選で彼が再々選される可能性があり、議会は去年の再選

ニュース日記 965
中村 礼治

ドナルド・トランプ と齋藤元彦